

# 土木の学び

—温故知新

## 土木技術者・研究者へのメッセージ —多くの出会いと多様な視点を大切に—

「語り手」松尾 稔 氏 名誉会員（公財）名古屋まちづくり公社 名古屋都市センター 最高顧問



松尾 稔 氏  
MATSUO Minoru

京都府出身。77歳。専門分野：地盤工学・防災工学。1960（昭和35）年京都大学土木工学科卒業。京都大学講師・助教授を経て、名古屋大学助教授・教授・工学部長・総長。第84代土木学会会長。日本学術会議第15・16・17期会員（第5部副部長）。国立大学協会第8常置委員会委員長。同協会副会長・同専務理事。文部科学省文化審議会委員（文化功労者選考分科会会長）等を歴任。現在、名古屋都市センター最高顧問、科学技術交流財団理事長。著書に「地盤工学—信頼性設計の理念と実際」等多数。2012（平成24）年瑞宝大綬章受章。

「土木工学の教育に長らく携わってこられた教授に学生がインタビューを行う「大先輩に伺う土木の学び—温故知新」（全3回）。最終回は、京都大学、名古屋大学で教鞭をとられ、名古屋大学総長を経て、現在は、名古屋都市センター 最高顧問でいらつしやる松尾稔先生にお話を伺った。「良い人との出会いで人生観が形成された」と話す松尾先生。人との出会いの大切さ、常に人を相手にする土木技術者としてあるべき姿を語っていただいた。

### 日本を豊かにしたい

——まず、土木工学を専攻された動機について教えてください。

松尾——私は、京都府の農村で生まれ育ち、戦後間もない小学5年生の頃、京都市内へ出てきました。京都市内へ出た時には、農村に比べて、「まちは栄えているな」という印象

を受けましたが、それでも当時のインフラ整備はとても貧しい状況でした。道路はほとんどが舗装されてい

ない土の道、台風がくると建物は半壊、河川は洪水に見舞われるという状況でした。このような中で、国土基盤を整備することもそうですが、もっと直截的に「豊かで便利な社会にしたい。貧しさから抜け出した

い。」という思いを非常に強く持つようなものでしたか。

松尾——まず、同級生の結束力が非常に強かったですね。毎日のように設計製図を行わなければならない、製図室にはずっと入り浸っていました。製図室は3年生と4年生が共同で使用することから、同級生だけでなく一年先輩、後輩とのつながりも強いものがありました。このように結束力が強かった理由として、ほと

んどの学生は生活が楽ではなかったことが挙げられます。同級生の間では生活も勉強も助け合いながら行うという機運があり、みんな助けたり助けられたりでした。たとえば、私は山岳部に所属しており、登山などで自宅を留守にすることが多かったのですが、その私が留守中、京都市内の自宅に、下宿の同級生がご飯を

食べにきているというのは、よくありましたよ。卒業してからも当時の同級生のつながりは強く、同窓会を開催して欠席する人はほとんどいませんよ。

——山岳部に所属していたということですが、どのような活動をされていたのですか。

松尾——まず、なぜ入部したのか説明すると、当時は現在ほどクラブ活



写真1 取材時の様子

動が活発には行われておらず、特に強い運動部もさほど多くありませんでした。そんな中、私は強い運動部へ入りたいという思いがあり、全国的にも指導的な立場にあった山岳部に入部しました。京都大学山岳部は、理系のみならず人文学や社会学系の一流の学者、科学者、技術者を多数輩出しており、OBの方と交流する中で、多くの良い出会いがありました。

た。この山岳部を通じた多くの出会いが、現在でも変わらない私の人生観を形成しています。

なかでも山岳部の活動のなかではリーダーの大切さを学びました。入部後初めての冬山登山はとても大変で、私は途中で一時リタイアを余儀なくされるほどでした。そんな中、リーダーは最後列を歩き指示を發しますが、雪崩は後方からもきます。リーダーに従わなければ命の危機に陥るといった経験を通じて、リーダーの存在意義を学びました。

—— 大学卒業後の進路についてはどのように決められたのですか。

松尾—— 経済成長が進む中で技術系の人材育成が喫緊の課題とされ、技術系学科の大学院の拡充が行われました。こうした状

況のなかで私も大学院への流れに乗ることが自然だと判断し、進学を決意しました。大学院に進学してみると今度は、拡大した大学院の学生を指導できる助手のレベルアップが課題だということがわかりました。

大学生活への想いがあったことに加え、当時の指導教授からの勧めもあって、大学へ残ることとなりました。人に恵まれて、時の流れで自然と進んでいきましたね。土質力学を専攻した理由で大きかったのは、当時の担当教授の人柄に魅かれたことでした。大学の教員は人間的な魅力が大事なんですよ。

### 徹底した現場主義

—— これまで多くの出会いを大切にされています。これらの出会いの中で何か得たものはありますか。

松尾—— たとえば山岳部には、工学を専攻している人は少なく文系など他学部、他学科に所属している人がほとんどでした。そのおかげで、先輩からさまざまな話を聞いて土木工学を学ぶだけではわからないこと

を、たとえば、文化文明論や科学技術に関することなど、人生観を含めてたくさん学ぶことができました。また、先輩から引き継がれてきた京都学派というものが、各分野の權威である学者の方々から私もその考え方を学びました。京都学派の特徴は、机上検討や観念的な思考よりも、徹底して現場を重視する「現場主義」であったことです。私は、この

思考のもと、土木の分野において現場が第一という姿勢を徹底してきました。まず初めに、現場から課題を見つけ、それを自分自身の人生観に照らし合わせ、大きな課題から研究課題を設定するという方法で研究動をしてきましたね。

—— 現場主義に基づく研究活動というお話がありました。長く土木教育の現場に携わってこられて感じる土木教育者・研究者としての想いを教えてください。

松尾—— 現在の土木工学は、かつての時代のように力学系、つまり水理学や構造力学のような各論だけを教えるのではなく、情報系、人文社会学系を含めた「文理融合」の総合工

# 土木の学び

—温故知新

学へと変化してきていると言えます。防災や環境などは特にその典型のようなもので、土木の範疇に入るものはいろいろと増えてきています。このように総合工学化してきたことを踏まえると、土木の教育者には特段の優れた資質や力量が求められていると感じています。

——特段の優れた資質や力量とは具体的にどのようなものですか。

**松尾**——最先端の研究と総合する能力です。最先端の研究は非常に重要で、これがないままに学問、技術の進歩はありません。さまざまな研究が同じ土俵の上に集まることによつて、土木工学が総合工学として成立します。だからこそ最先端の研究が必要で、本来の意味で「文理融合」していかなければならず、優れた教育者、研究者が必要です。

具体的には二つの点が大切です。まず、研究を行う際に文献から入らず、自分自身の興味から始めることです。これは私も若い研究者に対してよく言っていることで、文献を見て、この範囲は誰もやっていないから研究を始めようというのではな

く、自分自身の興味から研究に没頭するという姿勢で行う必要があります。二つめは、その研究を正しくチェックできる指導者の能力も同時に必要であるということだと思います。この様なことは一朝一夕にはいかない事柄なので、まずは、よい教育者・研究者が育つ環境を整えていくことが重要ですね。

——現在、土木を学ぶ学生にとって実際に

現場で技術者として働くまでに身につけておくべきことはありますか。

**松尾**——研究でもプロジェクトでも何をするにしても目的があります。その目的には善し悪しがあります。工学を学ぶものは、まずこの目的の善し悪しを判断することが大切です。また科学者としての思考も必要です。かつては「科学」「技術」と分けて考えられてきましたが、現在では「科

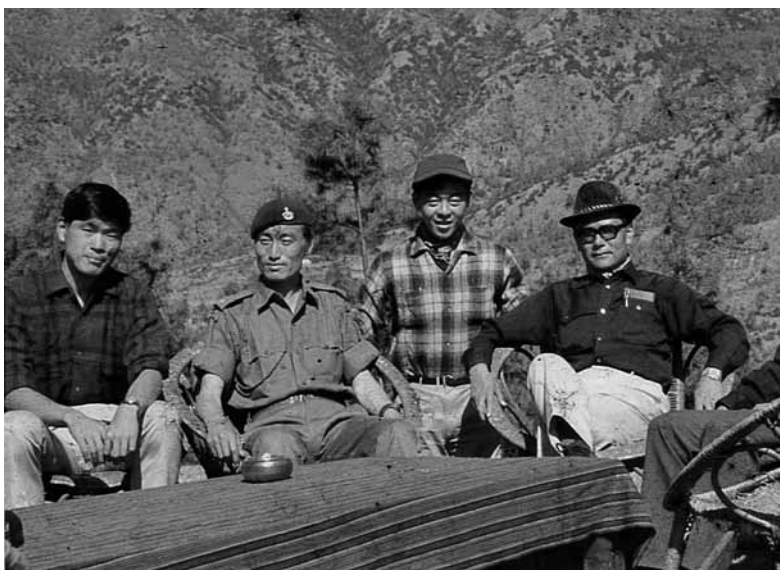


写真2 京都大学学士山岳会「ブータン学術調査隊」隊長 (33歳、松尾氏は写真右端) ブータン東部での休憩時の様子

学技術」と表現されるように、科学の成果が瞬時に、技術に活用されています。たとえば、人工衛星は技術力が結集したのですが、科学をもとに技術をもって人工衛星をつくり、それを活用して、新たな科学を生み出しています。このようなことから、土木を専攻する人の中にも、より科学的な思考を持った人が出てくることを期待しています。そして



写真3 同上調査旅行中のテントの中 (松尾氏は写真右から2番目)

土木技術者は「技術者としての責任」を持たなければなりません。だからこそ、今やっている研究が社会や人類に貢献できるという確信をもって行う必要があります。この確信こそが責任です。このようにして土木を専攻する人は、さまざまな分野を含めて、自分自身で経営や現場を管理できるようにすることが重要だと思います。精進を期待します。

——現在の社会において土木技術者は、どういう位置づけにあるとお考えですか。

**松尾**——かつての土木とは、土木技術があり国土を復興し経済成長を支えてきたというように、社会の中でも最も重要な学問としてとらえられてきました。しかし現在では、その恩恵が忘れられているように感じています。この状況のなかで、土木に限らず、技術全般に対する尊敬の念を、日本全体が取り戻さないといいないと思います。これは簡単なこと



写真4 取材時の様子

ではありません。この尊敬の念を取り戻すために土木技術者は、何か問題が生じたときに、先にも述べたとおり、土木技術者としての責任を自覚しながら、広い見地から良い仕事をすることをもって、社会に示していくことが大切だと思います。

### 相手の気持ちを理解する努力を続ける

——今後土木の将来を担う学生に対して期待することはありますか。

**松尾**——まず、土木工学は他の分野と比較して、身近に人がいるという学問であり、フィールドであるという認識が必要ですね。そして、土木構造物や土木施設のような社会インフラは公共のものであり、3世代、4世代先の人びととの共有の財産であるという考えを持ってください。自分たちだけが便利に使うことができれば良いというものではなく、現在を生きる人びとと、何世代も先を生きる人びとへの責任を果たすべきだという感覚を常に持っていなければなりません。

また、土木工学の研究課題や技術開発に関する領域は、今後ますます広がりをもっていくと考えられます。たとえば、これまでに見られない異常気象や、今後起きると予測されている巨大地震だけをとっても、今までの学問領域とは不連続に、ますます拡大していくでしょう。このような状況の中で今後は、国土のインフラを再構築しなければなりません。あえて「構築」という言葉を使うのは、ハード面やソフト面、維持管理や補修技術、あるいは人文社会学や環境学といった、社会において必要な要件をすべて含めた構築を行うという視点を、もたなければならぬからです。以上のように考えを進めていくと、土木工学は非常に重要で、今後が期待される良い分野であるとと言えます。学生のみなさんは、そういう良い学科に所属していることを認識し、危機こそチャンスだと思つて頑張つてほしいですね。

——最後に学生へのメッセージをお願いします。

**松尾**——心の持ちようではありませんが、相手の心を理解する努力を常に

行つていける人になってほしいと思います。私は「相手の心や気持ちを理解すること」と「教養」はイコールであると考えています。学生時代を通じて、これから土木技術者として社会で活躍するための教養、すなわち相手の気持ちを理解する努力を続けてほしいと思います。

〔取材・執筆〕

寺嶋 茂樹 学生編集委員

平田 望 学生編集委員